

## 囲碁と老人

王仙会創立30周年おめでとうございます。

会の活動から離れている衛星的な立場なのにお招きいただきまして本当にありがとうございます。しかも乾杯の役を仰せつかり恐縮に存じます。長らく御無沙汰しておりましたが、皆さん囲碁を嗜んでいるせいか、お変わりなく御健勝で何よりです。

遊びというものの意義を、学問上はじめて明らかにしたのはホイジンガの「ホモ・ルーデンス」(1939)です。歴大かつ克明な調査研究によって、遊びは人間の本能の一つであり、文化の源でもあることを解明しました。文芸はもとより、科学にとっても遊びの精神は効能があるようです。遊びの重要な要素はルールですが、それが法律の根幹になっています。現代ではゲーム理論を媒介にして様々な社会現象の解析が試みられるようになりました。遊びの要素は人間生活の万般に入りこんでいるのです。遊びやせんと生まれける子供は遊びによって成長し可能性を拓げます。大人も面白い存在であり続けるためには、遊びから知恵をもらい続けるのがよいでしょう。

ところで、老人は肉体の衰えは隠しようがありません。速く走ることも、若い美人を抱き上げることも難しくなり、もはや異性に色欲を起こさせることができないことも自覚しなければなりません。けれども老人は長い年月を生きた経験、それによるいくばくかの考え深さ、見識をもっていると思われまふ。

孔子は年寄りを元気づけます。「五十にして天命を知り、六十にして耳順(正しいことはすべて理解する)。七十にして己の欲するところに従い矩を踰えず」といいました。老人はすごい境地に立てる！ 旧約聖書には「白髪は誉れ高い冠である」、あるいは「あなたは白髪の人の前では起立して敬わねばならない」などと記されています。

19世紀初頭、ヴィクトル・ユーゴーは「若者は美しいが、老人は偉大なのだ。若者の眼には炎があるが、老人の眼には光明がある」と書きました。老人の眼に宿る光とは何か。「老人は移ろい易い日々を抜け出て、永遠の日々に入っていく」ともユーゴーは言っています。否応なしに生命個体として有限性に直面している老人は、かえって逆に、目先の損得を超脱でき、全体の生命系など世界の永遠の相に想いを致すことができる。

王仙会の20周年の記念誌の題名は「游悠・碁友」でした。老人にこそ静かに悠然と遊ぶ碁は相応しいと思えてなりません。長い航海を終えようとし、静かに帆を下ろしながらゆつくりと港に入っていく段階になったわれわれにとって、囲碁は神様が与えてくれたとでもいうべきこの世の最良の遊びに想われます。王仙会会員とその衛星諸兄が、今後とも碁に勤しんで、刺激をうけ興奮し、そしてくつろぎ、眼に光を宿して、さらに長く生命の灯をともし続けられますよう、そのためにも王仙会が長く存続しますように祈念して、杯を挙げましよう。

(2010.4.3 王仙会創立 30 周年 パーティあいさつ)